

接続助詞「が」の音調と意味用法 - 『日本語話し言葉コーパス』の分析を通して -

田頭(谷口) 未希 (東海大学 外国語教育センター) †

Boundary Pitch Movement and Usage of Conjunctive Particle “ga” - The Analysis of the CSJ -

Miki TAGASHIRA-Taniguchi (Foreign Language Center, Tokai University)

1. はじめに

発話の音調は様々な要因が関わっている。日本語では、文末や文節末の音調と、語と語のアクセントの強弱関係が発話の音調を決定する重要な役割を担っているとされる (郡 2003)。文末や文節末の音調を考えた場合、終助詞など文末の音調とその意味機能については多くの先行研究がある一方で、統語的にみた文節末での音調に関する研究は非常に少ないといえる。そこで『日本語話し言葉コーパス』(以下、CSJ と略す)を用い、文末・文節末の音調について、意味・用法との関連を定量的に分析し、対応関係を体系的に記述することを研究全体の目的とする。田頭(谷口)(2011)では1モーラからなる接続助詞の全体的傾向を分析するとともに接続助詞「が」について主に音調パターンに着目し分析を行った。本稿では、田頭(谷口)(2011)で用いた「が」の意味・用法の分類を見直し、下降調とその意味・用法との関係について報告する。

2. 分析データ

分析資料としてCSJのコアデータのうち、韻律情報が付与されている約18時間分(模擬講演107ファイル)を分析した。このうち、本稿では特に音調パターンが下降調という条件に限定して分析を行う。接続助詞「が」の総数は643例であるが、そのうち下降調は79例で、意味・用法の判定ができなかった1例を除いた78例が本稿での分析対象データである。本稿で下降調のみに注目した理由は、CSJのコアデータ全体の傾向として、韻律句末の約75%が下降調であるのに対して、CSJにあらわれる接続助詞「が」に関しては下降調がわずか10~20%しかないこと、この傾向は他の1モーラからなる接続助詞の句末音調の出現頻度ともかなり異なること(田頭(谷口)2011)があげられる。接続助詞「が」において極端に下降調が低い理由を意味・用法との関係から探る。

3. 音調パターンと意味用法

3.1 韻律句と句末音調

本稿ではイントネーションの物理的変化量として基本周波数を考え、「韻律句」は時間軸に沿って示される、冒頭の上昇から発話末にかけて下降していく基本周波数のひとつの山のまとまりと定義する。CSJではIntonation Phrase(以下、IPと略す)とAccental Phrase(以下、APと略す)の2つの韻律句がある。

CSJでは韻律句末の音調の型として、下降調(L%)、上昇調(H%)、上昇下降調(HL%)、低ピッチ区間を伴う上昇調(LH%)、そして上昇下降上昇調(HLH%)の5つの音調が定義されている。

3.2 「が」の音調

「新明解日本語アクセント辞典」(秋永 2002¹)によると、接続助詞「が」の語彙的情報として指定された音調は以下の2つである。

† t-miki@tokai-u.jp

¹ 付録(74)~(79)の表より。

(1)平板式動詞²に付く場合には、助詞の第一拍から低く下がってつく(例) わらうが³

(2)起伏式動詞に付く場合には、動詞の形を変えないで、低く下がってつく(例) よむが
したがって、語彙的には接続助詞「が」はそれ自身では音調変化を持たず、前接要素に続けて自然に下降していく音調をとる。ただし、これらはあくまでも語彙的情報として指定された音調であり、イントネーションによる影響をうけることがある点は秋永(2002)にも明記されている。

3.3 「が」の意味用法

接続助詞「が」⁴の意味機能・用法は、主に「逆接」や「対比」関係を表すほかに、「談話主題の提示」「前置き」「注釈」などに用いられるとされる(森田 1980)。先行研究であげられている意味・用法を基に、本稿では以下の6つの意味・用法を設定し、分類を行った⁵。

(1)「逆接・対比」⁶

- 授業は厳しいが、楽しい (M)
- 夏は日が長いけれども、冬は短い (M)
- よく猫は撫でてあげようと思って近づくと逃げてしまうので 私も追いかけるのが大変なんですが その点犬は撫でられると尻尾振って喜んじゃいますから全くかわいいもんです (S00F0031)
- このアドバイザーグループとは サークルとは違って あ 似たようなものなんですが え 違うとことがありまして その違うところというのは (S00F0088)

(2)「並列・累加」

- 英語ももちろんできるが、フランス語も話せる (M)

(3)「談話主題の提示」

- 昨日の話ですけれど、どうなりました (S)
- 比較的 あの 空室の部屋がないようなさまで え 非常に あのー 心地良く 過ごしております 今では あのー 私がスポーツクラブへ 毎日通っているんですが んー スポーツクラブの (S03F1477)

(4)「補足説明・前置き」

- 1912年というのは明治の終わった年ですが、この年に私の姉は生まれました (S)
- おたくの大学に入りたいという学生がいるんですが、手続きはどのようにしたらいいんですか (S)
- どうも あの 遠因 ま 遠い原因と書きますが あのー (S02M0068)
- それで あのー どうしたら こう 痩せられるだろうと思い 常に こう いろいろ研究をしていたんですが ま どんぐらい太っていたかと言うと (S00M0065)

(5)「注釈」⁷

² 動詞を例に挙げたが、他の品詞でも同様の音調パターンをとる。

³ 本稿では便宜上、前節要素と比べ低く下がる音を下線付きで示すことにする。

⁴ 接続助詞「けど(「けれども」)と意味機能や用法が似ていることから「が・けど」類とも呼ばれる。用例には「が」または「けど」「けれども」を示す。

⁵ 用例は M は森田(1980)、S は齋藤(2011)による。CSJからの用例には Talk ID を明記している。当該要素の「が」は太字で示し、CSJのデータについては句読点位置と推定される箇所でのスペースは筆者による。

⁶ 「逆接」か「対比」かは、前後の節関係に因果関係がみとめられるか、意味的コントラストをなしているかによって分類する研究もある(渡辺 2000)が、その違いには依然曖昧さが残されているため、本稿ではひとつの分類として扱う。

⁷ 田頭(谷口)(2011)で、発話は切り出されているが主要なテーマを補いたい場合や主題に付随する情報を付

- 夜分遅く恐れ入りますが、太郎君はいらっしゃいますか (S)
- (6) 「言いさし・言い切りの回避」
- やるだけはやってみますが…… (M)
 - まー 昼の生活夜の生活っていろいろありますけれども う 多分 分かる ようなねたなんで えー これ以上触れませんが ま というこで (S00M0112)
 - ま ちょっと 教育じみた話で 私も あの 長年 人事社員教育とやって たもんで どうしてもそのような あ ことに 落ち着くような気がしてお りますが えー あー その辺が これのお話のことをご披露申し上げまし た (S05M0412)

4. 結果と考察

接続助詞「が」はその品詞の特徴として文節に置かれ、統語的切れ目となる。音声的には、「が」の直後にポーズの挿入や次にくる韻律句でピッチの立て直しが起こる可能性が十分に考えられる。実際、ここで分析対象とした「が」の78例の下降調は全て韻律境界がIPで、APは1例もなかった。これは、下降調となる「が」では、次の韻律句頭でピッチの立て直しが起こるか、長いポーズを伴っている場合などであることを意味する。また、「あー」「えー」などの複数のフィラーの連続が生じている例もみられた。

IP境界だからといって直後に必ずポーズが挿入されるとは限らないが、長いポーズはIP境界を決めるひとつである。そこで、「が」の直後の200msec以上のポーズの有無を調べた。ポーズを伴わないものは78例中13例で、短いものではポーズの長さが50msec程度であった。ポーズの挿入がある65例は230～4500msecと様々であった。文節末の音調について、上昇調は直後にポーズを伴うのが普通である(郡 2003)という報告もある。「が」に関しては下降調でも直後にポーズを伴うことが多く、しかもかなり長いポーズを伴う場合もあ

表1 意味・用法の頻度とポーズの平均時間長

意味・用法	生起数	ポーズの平均時間長 msec
補足説明・前置き	46 (60%)	761.67
逆接・対比	24 (31%)	691.13
言いさし	6 (8%)	1747.49
談話主題の提示	1 (1%)	523.04

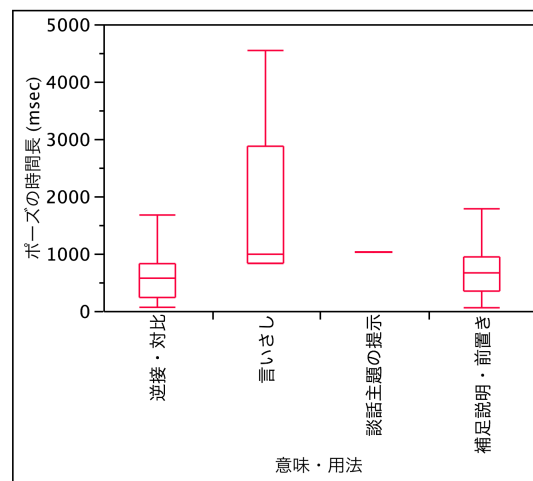


図1 意味・用法によるポーズの時間長の平均と分散

け加えたい場合と定義した「注釈」は、本稿では「補足説明・前置き」と「注釈」の2つに分けて分類することにした。田頭(谷口)(2011)では決まり文句のような単なる前置きの表現(本稿での「注釈」と発話の内容を補足する前置きの表現(本稿での「補足説明・前置き」)同じカテゴリに分類したが、本稿では両者を区別してより詳細な分類の観点から再度分析を行うことを目的としたためである。

るようである。

次に意味・用法と音調パターンとの関係のみをみる。3.3節で6つの意味・用法の分類をあげたが、下降調では「並列・累加」と「注釈」用法に分類される例はみられなかった。表1に下降調の意味・用法別の頻度と、「が」直後のポーズの平均時間長を示す。下降調をとる場合、補足説明や前置きの用法であることが最も多く、半数以上を占めた。2番目に多かった逆接・対比の用法を合わせると「が」の下降調の9割がこの2つの用法のいずれかであることになる。先にも述べた通り、「が」の下降調はIP境界のみであったことを考えると、補足説明・前置きや逆接・対比の用法では韻律的により大きな境界を作っていることになる。談話構造の観点から、補足説明・前置きは付け足しではあるけれど、その部分だけで意味的にひとかたまりになっていると考えられ、そこが音声的にも大きな切れ目を作って独立したかたまりとなっていると解釈できる。さらに補足説明や前置きである内容が特別強調すべきことでなければ、音声的際立ちは必要でないため、下降調が用いられる割合が高くなる。一方、最も少なかったのは談話主題の提示の用法であった。これは逆に、境界という側面からは、新しいトピックを導入するという意味で次に続く発話とは強く関連しているため、IPとなる可能性が低くなると予測される。一方で新しいトピックの導入は、場合によってはそこを際立たせる必要が生じることも考えられ、この点では下降調以外の音調を使う方が音声的にトピックの導入としてのひとかたまりを示すことができるといえよう。しがたって、談話主題の提示には下降調を用いないという戦略は十分に考えられる。

直後にポーズを伴う場合のポーズの平均時間長は、言いさし用法の場合が最も長く、最も平均が短かった談話主題の提示の用法に比べ、3倍以上の長さであった。言いさし用法は「が」に続く事柄と直接的に関係していない事柄が多いと考えられ、ポーズが長くなるのは全体の生起数が少ないことを考慮しても、ある意味妥当な結果であると考えられる。

5. まとめ

CSJをデータとし、接続助詞「が」が下降調をとる場合の意味・用法との関係について分析した。「が」が下降調である場合、境界はIPのみが観察され、「が」の直後にポーズを伴うことが多かった。意味・用法の観点からは補足説明や前置きの場で下降調が用いられることが最も多かった。これは補足説明や前置きはあくまで付け足しであるため、そこには音声的際立ちを置く必要性が低く、そのため下降調が用いられやすいといえる。

謝 辞

本研究は、文部科学省科学研究費補助金 若手研究(B)「日本語の自発音声における韻律句末音調と意味機能の分類に関する研究」による補助を得ています。

文 献

- 秋永一枝(2002)「アクセント習得法則」『新明解日本語アクセント辞典』第二版、金田一春彦(監修)秋永一枝(編)、pp.1-99、三省堂
- 郡史郎(2003)「イントネーション」『朝倉日本語講座 音声3 音声・音韻』上野善道(編)、pp.109-131、朝倉書店
- 齋藤美穂(2001)「接続助辞ガ・ケレドモの意味・機能と文法的制約」『阪大日本語研究』23、pp.33-55 (<http://ir.library.osaka-u.ac.jp/metadb/up/LIBNIHONGOK/23-02.pdf> からダウンロード可能)
- 田頭(谷口)未希(2011)「話し言葉にみられる接続助詞の音調-1 モーラ接続助詞の場合-」『人工知能学会研究会資料』ISSN 0918-5682 SIG-SLUD-B003-04、pp.19-22
- 森田良行(1980)『基礎日本語2 意味と使い方』、角川書店
- 渡辺学(2000)「逆接表現の記述と体系 ケド・ワリニ・クセニをめぐって」『現代日本語研究』7、大阪大学大学院